

A black and white photograph of a man with long, wavy hair and a beard, looking upwards and to the left. He is wearing a dark, high-collared coat over a dark sweater. He is holding a cello, which is positioned vertically in front of him. The background is a dark, textured grey.

Nicolas Altstaedt Cello Recital

ニコラ・アルトシュテット
無伴奏チェロ・リサイタル

2023年2月19日(日) 14:00 開演
紀尾井ホール

2:00 p.m., Sunday, February 19, 2023 at Kioi Hall

主催：ジャパン・アーツ



ニコラ・アルトシュテット(チェロ)

Nicolas Altstaedt, Cello

美しい音色と、楽々とこなす技巧性で知られるドイツ・フランス系のチェリスト、現在活躍中のチェリストの中でも、最もクリエイティブで、多才な一人である。ソリスト、弾き振り、そして室内楽でも世界的に定評があり、バロック音楽から現代曲までの幅広いレパートリーの演奏で聴衆を魅了している。

2017/18シーズンには、ヘルシンキ・フェスティバルでエサ=ベッカ・サロネン作曲のチェロ協奏曲を作曲者本人の指揮の下、フィンランドで初演し賞賛された。また、アムステルダムのコンサートホールでは「アーティスト・イン・スポットライト」を務めている。

2012年にギドン・クレーメルから後継者に選ばれ、ロッケンハウス室内楽音楽祭の芸術監督に就任。2014年にはアダム・フィッシャーの後継としてハイドン・フィルハーモニックの芸術監督にも就任し、ウィーン・コンツェルトハウス、エステルハージ・フェスティバルで定期的に演奏し、最近では中国・日本ツアーを行っている。

また、新作の初演にも積極的に取り組み、トーマス・アデスやヨルグ・ヴィットマン、プライス・デスナー、ファジル・サイ、セバスチャン・ファーゲルンドなどの作曲家と演奏を行っている。2016年には、映画監督のフェデリーコ・フェリーニの台本にインスパイアされたチェロ協奏曲を、ピアニスト・作曲家であるハウシュカに委嘱し、ロンドンとドイツのデュースブルクで初演された。

ロッケンハウス音楽祭での最近の室内楽の録音は、2020年のBBCミュージック・マガジンの室内楽賞、及び同年のグラモフォン賞を受賞。ハイペリオン・レコードで録音したアルカンジェロとジョナサン・コーエン共演によるC.P.E.バッハの協奏曲集は、2017年のBBCミュージック・マガジンの協奏曲賞を受賞し、ワーナー・クラシックスのファジル・サイ共演のリサイタルのレコーディングは2017年のエジソン・クラシック賞を受賞するなど、多数の受賞歴を持つ。

J.S.バッハ J.S. Bach

無伴奏チェロ組曲 第1番 ト長調 BWV1007

Cello Suite No. 1 in G Major, BWV1007

- | | | | | | |
|------------|---------------|---------------|---------------|---------------|-----------|
| 1. 前奏曲 | 2. アルマンド | 3. クーラント | 4. サラバンド | 5. メヌエットI/II | 6. ジーグ |
| I. Prelude | II. Allemande | III. Courante | IV. Sarabande | V. MenuetI/II | VI. Gigue |

無伴奏チェロ組曲 第2番 ニ短調 BWV1008

Cello Suite No. 2 in D Minor, BWV1008

- | | | | | | |
|------------|---------------|---------------|---------------|---------------|-----------|
| 1. 前奏曲 | 2. アルマンド | 3. クーラント | 4. サラバンド | 5. メヌエットI/II | 6. ジーグ |
| I. Prelude | II. Allemande | III. Courante | IV. Sarabande | V. MenuetI/II | VI. Gigue |

無伴奏チェロ組曲 第3番 ハ長調 BWV1009

Cello Suite No. 3 in C Major, BWV1009

- | | | | | | |
|------------|---------------|---------------|---------------|------------|-----------|
| 1. 前奏曲 | 2. アルマンド | 3. クーラント | 4. サラバンド | 5. ブーレ | 6. ジーグ |
| I. Prelude | II. Allemande | III. Courante | IV. Sarabande | V. Bourrée | VI. Gigue |

* * * * *

無伴奏チェロ組曲 第4番 変ホ長調 BWV1010

Cello Suite No. 4 in E-flat Major, BWV1010

- | | | | | | |
|------------|---------------|---------------|---------------|------------|-----------|
| 1. 前奏曲 | 2. アルマンド | 3. クーラント | 4. サラバンド | 5. ブーレ | 6. ジーグ |
| I. Prelude | II. Allemande | III. Courante | IV. Sarabande | V. Bourrée | VI. Gigue |

無伴奏チェロ組曲 第5番 ハ短調 BWV1011

Cello Suite No. 5 in C Minor, BWV1011

- | | | | | | |
|------------|---------------|---------------|---------------|------------|-----------|
| 1. 前奏曲 | 2. アルマンド | 3. クーラント | 4. サラバンド | 5. ガヴョット | 6. ジーグ |
| I. Prelude | II. Allemande | III. Courante | IV. Sarabande | V. Gavotte | VI. Gigue |

[ニコラ・アルトシュテット 2023年日本公演 スケジュール]

2/10(金)	[東京]	紀尾井ホール	主催:日本製鉄文化財団 ●紀尾井ホール室内管弦楽団との共演
2/11(土・祝)	[東京]	紀尾井ホール	主催:日本製鉄文化財団 ●紀尾井ホール室内管弦楽団との共演
2/17(金)	[京都]	京都コンサートホール	主催:京都市音楽芸術文化振興財団、京都市 ●京都市交響楽団との共演
2/19(日)	[東京]	紀尾井ホール	主催:ジャパン・アーツ
2/21(火)	[東京]	トッパンホール	主催:トッパンホール

J.S.バッハ 無伴奏チェロ組曲 第1番～第5番 BWV1007～1011

那須田 務 (音楽評論家)

Tsutomu Nasuda

チェロの音楽の最高峰といわれるJ.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》だが、作曲された年や動機などに関してほとんど何も分かっていない。バッハ自身の手による浄書譜が残されている《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》と違って、バッハの妻アンナ・マグダレーナや弟子のケルナーらによる筆写譜しか伝えられていないためだ。それでも、先の「無伴奏ヴァイオリン作品」のバッハの自筆譜に「1720年、作品1」と記されていることなどから、「無伴奏ヴァイオリン作品」の続編として1720年以後、それもケーテン時代(1717年～1723年)に書かれたというのが、従来の一般的な見解だった。バッハが宮廷楽長を務めていたケーテンには、アーベルという優れたガンバ、チェロ奏者がいたことがその根拠になっているのだが、昨年刊行された『バッハ作品目録』(第3版ブライトコップフ&ヘルテル社)では、ライブツィヒ時代の「1725年頃、個々の楽章についてはもっと早い時期に成立したか、より古い原曲に基づく」とされている。問題は4種類の筆写譜が細部において異なるために、アーティキュレーションなどについてのバッハの真意が分からないことだ。そのため、現代のチェリストたちは、これらの楽譜をもとに校訂された現代の出版譜を使うか、自身で決定版を作って演奏している。

また、第5番で通常とは違う変則調弦が、第6番は5本の弦を持つ小型のチェロが想定されている。後者については、バッハの周辺にあった弓奏弦楽器ヴィオラ・ボンポーザ(腕に乗せて弾く小型のチェロ)で演奏されたのではないかとされている。ちなみに先の『バッハ作品目録』では「(この組曲は)アンナ・マグダレーナの筆写譜のタイトルに記されている、大きさや製造法、演奏法が標準化される以前の当時のチェロで演奏される。もしくはバッハが他の音楽作品にも用いている小型のピッコロ・チェロ、ヴィオラ・ダ・スパラでも可能」とある。ヴィオラ・ダ・スパラ(ヴィオラは弦楽器、スパッラはイタリア語で「肩」の意味)は先の近年、楽器製作家でバロック・ヴァイオリン奏者のパディアロフによって復元されたヴァイオリンのように肩で支えて弾く小型のチェロで、先のヴィオラ・ボンポーザのこと。

全6曲はいずれも前奏曲と舞曲楽章を連ねたバロックの組曲である。前奏曲、アルマンド(4拍子)、クーラント(3拍子)、サラバンド(3拍子)、ジグ(8分の6拍子)からなり、ジグの前にメヌエット(3拍子)やブーレ(2拍子)、ガヴオット(2拍子)といったバッハの時代に流行していたより新しい舞曲が入る(これを流行舞曲ガランティーという)。音楽面での特徴としては、

こうした舞曲的な要素に加えて、一本の弓と4本の弦のみのチェロ(第6番を除く)で豊かな和声や複数の声部によるポリフォニックな音楽の演奏が想定されていることだ。実際に曲中に重音が頻出するものの、記譜されず、鳴ってもいない音を想像で補いながら弾き、聴くことが求められていて、それがこの曲集の難しさもあると同時に大きな魅力になっている。なお、本日は6番を除いた1番から5番までの5曲が演奏される。

ここからは個々の楽曲について述べよう。

第1番ト長調は、16分音符のアルペジオが特徴的な前奏曲、安らぎに満ちたアルマンド、快速テンポで疾走するイタリア風のクーラント、緩やかなテンポで一拍目からアクセントのある2拍目に重心が移動するリズム(タ・タータ・タ)が特徴的な舞曲サラバンド、短調の第IIメヌエットを持つメヌエットI・II、跳躍ダンスのジグからなる。

第2番ニ短調は、複数の声部が平行して奏でられるポリフォニックな前奏曲、やはり多声的なアルマンド、快速テンポのイタリア風で3声の音楽に聴こえるクーラント、荘重な趣をもち、部分的に隠された通奏低音の声部が聴こえるサラバンド、短調のメヌエットIと長調のIIが対比される一対のメヌエット、そして躍動感に満ち、重音が多用されるジグで締め括られる。

第3番ハ長調は、2オクターヴの音階を駆け降りるパッセージに始まる前奏曲、中庸なテンポで歩むアルマンド、幅広い音域の下降と滑らかなスラーのパッセージからなるクーラント。4つの音の重音で始まる重厚なサラバンド。愛らしい旋律が人気でしばしば単独でも演奏される一対のブーレ、ダイナミックで野生味に富んだ農民風ダンスを彷彿とさせる多声的なジグからなる。

第4番変ホ長調は、幅広い音域の分散和音による前奏曲で開始され、流れるようなパッセージが特徴のアルマンド。二つの8分音符と三連符が交互に現れるクーラント、通奏低音上の歩みの上に歌われるオペラのアリアのようなサラバンド、リズムカルで楽しい一対のブーレ、弾き手の名人芸が求められるジグで閉じる。

第5番ハ短調は、一番上の弦(ラ音)を一音下げてソ音にする変則調弦を指定することで主音(ハ音)に次いで重要なソが強調される。また、この組曲にはリュート独奏版ト短調BWV995があるが、どちらが原曲かは意見が分かれるところだ。前奏曲はフランス風序曲の形式で書かれ、ゆっくりとした序奏と4声のフーガからなる。フランス風の性格はアルマンドとクーラントも同様。いずれも流れるようなパッセージを特徴としているが、後者は荘重な趣を持つ。これにスラーで繋がれた4つの八分音符と四分音符からなるいくぶん瞑想的なサラバンド、二つのガヴオットを経て躍動感に満ちたジグが続く。